

第二節 王都中心部の惨状とペデガシエの画業

『地震と火災によるリスボン荒墟の偉観』

- 一、フランスの書評誌『文芸年報』とペデガシエの画業『リスボン荒墟の偉観』
- 二、王都中心部の惨状と画集『リスボン荒墟の偉観』
- 三、画集『リスボン荒墟の偉観』の意義および特色

承 前

論文第二 リスボン大地震とポルトガルの

文人ミグエル・テイベリオ・ペデガシエ

Ⅰリスボン大地震 近代ヨーロッパの社会的震撼 その二

第一節 フランスの月刊誌『ジュルナル・エトランジエ』と

リスボン在住の通信員ペデガシエ

- 一、『ジュルナル・エトランジエ』におけるポルトガル学芸の紹介、
- 二、通信員ペデガシエによるリスボン大地震の記録
- 三、スペイン通信員による震災の報告

第二節 王都中心部の惨状とペデガシエの画業

『地震と火災によるリスボン荒墟の偉観』

一 フランスの書評誌『文芸年報』とペデガシエの画業『リスボン
荒墟の偉観』

一七五五年の夏『ジュールナル・エトランジエ』の責務をプレヴォーから引き継いだフレロンは、すでにその前年書評を主体とする雑誌『文芸年報』を独自に発刊していた。同誌の基調は絶対王政とキリスト教を擁護するため、ヴォルテールなど 哲学者たち を批判するところがあり、フレロンはとりわけこの事業もために啓蒙思想の宿敵として後世に伝えられる。

リスボン大地震の翌々年、一七五七年の『文芸年報』二月号にはヴォルテールの劇作『メロープ』や『百科全書』の項目 ジュネーヴ への論評とともに、刊行者宛の書簡として、ミグエル・テイベリオ・ペデガシエの画業に関してつぎのような一文が掲載された。

リスボン荒墟の版画

不幸なポルトガル王都の震災のあと、当地に住むふたりの芸術家、パリおよびペデガツシユの両氏が破壊されたまま大建造物の主要な様相について、六点の素描を制作しました。大都会の貴重な荒墟の一端を、版画という職分によって後世に伝えようと尽力されたのです。これを成就するため彼らは素描をパリに送付され、ひとりの理解ある愛好家、趣味と良識を兼ね備えた人物が、そうした希望を欣然と受け入れ、作品を公に供するよう力を添えました。彼の依頼によってこの分野における権威者、王室専属建築家ブロンデルが企画を検閲されたのです。かくして後者は素描の印刻をルバに委託され、いつもながらこの彫刻家が六点の美事な版画の制作に技芸の限りを尽しました。パリでこの作品が販売されるのは、コルドリエ街に近いラ・アルプ街のブロンデル宅、同じくはラ・アルプ街でベルシエ街に面したルバ宅、さらにサン・ジャック街のシュロー未亡人宅。六つの版画に表紙を添え、定価は一部十二リールとされています。

この作品の表紙にはポルトガル語とフランス語で標題と制作者名が併記されている。「画集・一七五五年十一月一日の地震と火災によるリスボン荒墟の壮观 現地においてパリおよびペデガシエの両氏により素描が描かれ、パリにおいて王室首席彫刻家ジャック・フィリップ・ルバのもとで印刷された。」また、そこには王権による出版許可と三カ所の販売元も明記されている。ちなみにこれらの記述から推察すれば、建築家ブロンデル、彫刻家ルバ、販売元シュロー未亡人が居住し、ペデガシエの画集刊行に尽力した地域は、セーヌ左岸のカルチェ・ラタン、繁華なサン・ミッシェル界隈である。『文芸年報』の本拠をサン・ルイ島に構えるフレオンも、支所をサン・ジャック街に置いた。

銅板による六点の絵図は縦四〇センチ、横五六センチの紙型であって、各々にポルトガル語とフランス語で画題が誌され、彫刻家ルバの署名が付せられている。すなわち、第一は「総大司教座の塔と呼ばれるサン・ロケの塔」、第二は「サン・パウロ教会」、第三は「サンタ・マリア大寺院（大聖堂）」、第四は「歌劇場」、第五は「サン・ニコラウ教会」、そして第六は「総大司教座広場」。こうした画題が列記されて、さきの書簡にはつぎのような讃辞が続いている。

これらの偉観は精彩ある図像で表現され、建造物の幾何学的な巨大さを巧みな配置が彷彿とさせます。すべて完璧という規範に則るのです。こうした版画が最高の絵画的感銘を与えるのも、ルバの彫刻の技によるところ大であります。貴下がこの画集を熱心にご覧になることを、私はいささかも疑いません。なぜなら、徳高く明敏なすべての魂はかの怖るべき出来事に無関心ではありません、パリをはじめ各地の図書館、愛好家の折匏や書齋に被災の絵図が蔵されることに賛同されるでしょう。敬具。

パリにて、二月二二日。

この銅版画集は一七五六年にパリで印刷と発売がなされたあと、翌年ロンドンにおいて再販され、その際に彩色版も公刊された。彩色された版画には英文による見出しが付加されている。こうした彩色化にペデガシエ自身がどう関与したかは記録されていない。また、共同制作を担ったパリ氏が、いかなる人物であるかも不明である。

これらは十九世紀に至るまでしばしば再版され、版元によって仕上りに精粗の差が認められ、単色の図版でもときには火焰の先端に薄い朱色が施された。『リスボン荒墟の偉観』は災害の厳密で系統的な描写としては画期的と評価され、二八年後イタリアのシアンタレツィー門が初めてこれを継承し、版画集『カラビア地震』六八点を制作した。

二、王都中心部の惨状と画集『リスボン荒墟の偉観』

画集『リスボン荒墟の偉観』は震災を描写した代表的な絵図と評価され、個々の版画が多く歴史書や旅行案内に転載されている。しかし、ここに描かれた建物や地区について、私たちの多くは必ずしも十分な知識を有していない。以下本稿ではこれらの絵図の意義と特質を深く理解するため、リスボンの建造物と大地震の状況に関する若干の史料を繙くこととしたい。

第一の版画に表出されたサン・ロケの塔（総大司教の塔）は、リスボンの市壁の一角に築造され、王都の建設と防衛を伝える重要な古蹟であった。ポルトガルの初代国王アフォンソ・エンリケス（アフォンソ一世）はイスラム勢力を撃退する第二次十字軍に参じ、一一四七年十月二五日難攻不落のリスボンを四百年ぶりに奪還した。この地の城砦サン・ジョルジュを居城と定め、城門の傍らに定期市も開設する。一二五五年コインブラから王都がリスボンへ遷され、外国貿易の発展とあいまって最初の造船所が建造された。しかし、イベリア半島中央部からたえず政治的圧迫を加えられ、一二七二年カステリア王国の軍勢が国境を越えてテージョ沿岸へ進撃した。デジャミラ・コウト著『リスボン市史』には、十四世紀における王都の受難と惨状がつぎのように書かれている。

一三七三年二月二三日リスボンはスペイン勢力の手中に陥落した。やがて長期にわたる交渉の結果、国王フェルナンドが敵軍を撤退させるが、占領による被害は甚大であった。市壁が打ち破られ、都心のユダヤ人地区や造船所周辺をはじめ、沿岸部の建物が壊滅した。多くの住居が焼打ちや掠奪を蒙つ

Jan T. Kozak and D. James, *Historical Depiction the Lisbon Earthquake.*

On-line : <http://nisee.berkeley.edu/lisbon/>

Dejanirah Couto, *Histoire de Lisbonne*, Paris, 2000, pp.61-62.

On-line : <http://nisee.berkeley.edu/lisbon/>

たのである。市壁の外では災禍が一層大であった。近郊の村落も土壁で囲まれた漁師小屋も破壊され、田畑は掠奪を受け、作物は焼尽した。

こうした侵略と蛮行を封じるため、国王フェルナンドは城塞都市リスボンの強化を専念し、市壁と市門の増設を指令した。言うまでもなく市壁は外部からの攻撃や侵入を封じるためであり、市門は内部への往来を取り締まる関所である。市壁のあちこちには高い塔が築かれ、遠方の動きも展望台から把握できた。バティスタ・デ・カストロ著『地誌ポルトガルの古今』は、この国の風土、歴史、建築、習俗などを詳説した人文地理の古典であるが、そこにはフェルナンドによる市壁と塔の建造に関する叙述が見出される。

奪還から二世紀が過ぎたあと、治世を司る国王フェルナンドは、カステリア人の侵略による近年の苦難を考え、リスボンの城塞を強化するのを感じた。ジヨアン・アネスデ・アルマダとヴェドール・ダ・ファゼンダの助言を受け、一三七三年国王は新たな市壁と高い塔を築くよう命令する。また、開発と発展をさらに進めるため、沿海部についてはアルマダ、セジンプラ、パルメラ、セトゥーバル、コイナ、ベナベントの住民およびテージョ河岸の全員を、内陸部についてはシントラ、カスカエス、トアレス・ヴェドラス、マフラ、アランケル、アルダ、アトウギア、ルリンハ、シレイロス、ポヴォス、ヴィラ・フランカ、アルデア・ガレガの住民を賦役に供するよう命令した。この建設工事は果敢に遂行され、一三七五年に新たな境界と市壁が確立、円周七千パソを新たな境界として、多数の市門も市壁に付設された。

このような市壁と市門はつとにアフオンソ一世によって築造されていたが、フェルナンドの斯業はそれらを一層拡大し、増強させるものであった。『地誌ポルトガルの古今』においては一三七五年に建立された市門また小門三三の地点が列挙され、リスボン西北端についてつぎのように記述される。

第八 コンデスタヴェル門、またはカルモ門。拱門の頂上に聖者像を安置

ibid., p.76.

Joao Bautista de Castro, *Mapa de Portugal antigo, e moderno*, Lisboa, 1768. tomo terceiro, parte V, pp.77-78.

するので、いまはサン・ロケ小門と呼ばれる。サン・ロケ教会の一部としてかつて高い塔もこれに隣接していたが、先年の地震で崩れて、ニザ侯爵邸への通路に倒壊し、ふたりの貴族が死亡した。総大司教枢機卿猊下が例年儀式に臨まれたところである。

第九 イリンダーデの門または小門。イリンダーデ修道院に隣接して築かれ、これを通り抜けると、広いサン・ロケ街へ出る。

一七六〇年代に上梓されたこの大著は、さまざまな建物の由来や役割を詳しく述べるとともに、なお記憶に新しい大地震の被害をも随所で語っている。サン・ロケ教会とそこに隣接する建造物については同じくバティスタ・デ・カストロの記述が貴重であり、これによってサン・ロケの塔がなぜ総大司教の塔と呼ばれるかも理解できる。

サン・ロケ。この誓願場はイエスズ会に属し、一五〇六年に創設されたサン・ロケ教会の所有として、一五五五年ジョアン三世陛下の命によりこの地に設立された。一五六七年に改築がなされている。

総大司教枢機卿トマス・アルメイダ猊下の要請によってこの教会で一七一八年十二月末日に神を讃える荘厳で敬虔な儀式が行われ、以後毎年同じ日に盛大な行事を営む慣例となった。そこには国王ご一家とすべての高位高官が参列し、最良の楽師と楽器による合奏のもとで、サント・アントオ・コレジオの全学生と住民から成る合唱団によって讚美歌が歌われる。こうした行事が大地震以降は途絶えた。そのためアジューダ教会の隣り、新たな宮殿の王室礼拝堂でこの慣例が盛大に営まれ、国王ご一家が参列される。

一七五一年一月十三日サン・ロケ教会に類なきサン・ジョアン・バチスタ礼拝堂が開示され、人々は象眼細工の絶妙な美術品に驚嘆した。この作品は玲瓏たる貴重な宝玉と壮麗な装飾で際立ち、総額二百万の経費を要したとされるが、最高の工芸家によってローマで製作され、慈愛深く敬虔なジョアン五世陛下がそこに置くよう所望されたものである。

地震という災禍によって教会正面の一部と塔が破壊されたものの、すべて修復された。

Bautista de Castro, *op. cit.*, p.79.

Bautista de Castro, *op. cit.*, p.79.

二〇世紀の前半リスボン大地震の震災記録を集成したペレイラ・デ・ソウサも、『地誌ポルトガルの古今』の多くを採択する。左記の一文はバティスタ・デ・カストロの記述と部分的に重複するが、同時代の記録がどのようにに継承されるかを知る一助ともなる。なお、この集成では画集『リスボン荒墟の偉観』の史料的价值も高く評価され、「総大司教広場」などいくつかの版画も転載されている。

サン・ロケ修道院 この修道院はイエズズ会に所属し、サン・ロケ教会と同じく、敷地にある古蹟に因む名称を持つ。一五五五年に修道会が結成され、一五六七年修道院として再編された。

セグンド・バティスタ・カストロによれば、震災によって教会正面の一部と塔が破壊された。同様にモレイラ・デ・メンドンサも言う。サン・ロケの修行場では正門が倒壊し、塔などの建造物が破壊された、と。

十六世紀のプロウニオ地図を見ると、サン・ロケ教会の西側、教会正面に隣接してひとつの塔が描かれている。現在はこの塔が存在せず、地震で倒壊したと推測される。

なお、サン・ロケ修道院に沿ってフェルナンドの市壁が続き、その一角にアルヴァロ・パイスの塔と呼ばれる角塔が築かれていた。ルバ印刻の版画集に示されるとおり。この塔が一七五五年の地震によって甚大な被害を受けたと思われる。

第二の版画に描かれたサン・パウロ教会については、破壊された外壁とともに、崩れ落ちた石材や瓦礫が印象的である。描かれた人物像が比較的多く、彼らの服装や様子は平常とさして変わらない。

サン・パウロ教区は王宮西の河畔に近く、人口のきわめて稠密な地区にある。大地震、大火、大津波という三重の猛威に曝され、もつとも被害の大きな地域のひとつとされる。モレイラ・デ・メンドンサは著書『世界地震通史―リスボン大地震』で火元のひとつとしてサン・パウロ教会を挙げ、そこから始まる周囲七キ

口の円形を描いて、延焼の及んだ範囲としている。この教会の起源は非常に古く、一四二二年の創建と門前の石碑に刻まれ、一五七二年作成のリスボン市街図にも記載されると言う。さきに述べた『地誌ポルトガルの古今』にはサン・パウロ教会についてこうした由来とともに、十年前の被災の状況も誌される。

サン・パウロ教会も大地震によって破壊され、そこでは六十人以上の信者とふたりの聖職者が死亡した。直後の火災によって神殿とそこに蔵される一切も焼尽した。被災を免れたのは、秘蹟像だけである。この聖像は当日洗足のためジョアオ・ネポミュセノ教会に移され、翌日日曜の夜にはサンタ・イザベル教区の教会に、以後はふたたびジョアオ・ネポミュセノ教会に置かれた。古い建物の横に木造の教会が造られたのち、一七五七年の聖体祝日の前夜によろやく聖像は戻された。

テージュ河畔には食肉や海産物を扱うヨーロッパ有数の食品市場も建造され、国際的な貿易や国内運輸の拠点でもあった。ジョゼーアウグスト・フランカ著『啓蒙の都市 ポンバルのリスボン』には震災前の中心部についてその歴史や特徴が綿密に考察され、河岸地区に関しつぎのように語られる。

そこには海運に係わる人々、水先案内人、船大工、香料貿易商などのため、質素な住宅が建設された。とりわけ一五三一年の地震以降こうした新規の人々が新しい地域を求めたのである。三年以内に竣工しなければ重税を課するとの制約のもとでそれらは大急ぎに施工された。険しい坂が多く、起伏に富む土地であるため、すべての道路がくねくねとし、登り降りするのである。

ペデガシエなど知識人や聖職者の記録は別として、ポルトガル住民の証言は数少ないが、市街の被災や民衆の艱苦を伝える史料として、とくに注目すべきは外

J. J. Moreira de Mendonça, *Historia universal Dos Terremotos*, Lisbon, 1757. pp.125-126.

Bautista de Castro, *op.cit.*, p.395.

José-Augusto França, *Une ville des Lumières, la Lisbonne de Pombal*, Paris, 1965. pp.25-26.

国人在留者の報告である。イギリスの貿易商ブラドックも河岸地区に住み、万聖節の朝は一階の居室で手紙を書いていた。便箋の震えで異変に気づき、上の階が崩れかかるのを見た彼は、沈着にも必要な物品を携え、急ぎ戸外へ脱出する。テージュ河畔への街路も王宮に至る大路も建物の倒壊で通行できない。ようやく裏道の瓦礫を押し分け、サン・パウロ教会へと進んだ。イギリスの研究者エドワード・ペイスの考証によれば、貿易商の邸宅は王宮の西一マイル弱、サンタ・カテリーナ教区に含まれ、通り抜けた長い細道は高層建築を連ねるディレイタ・ダボア・ヴィスタ街である。虎口を脱した彼がつぎに目撃したのは、サン・パウロ広場の凄惨な光景であった。火災と津波にも脅かされ、転々と移るブラドックの避難先は、ペデガシエの筆による素描六点とかなり重なっている。祖国の高位聖職者に宛てた彼の書簡から、以下四カ所に関連して貴重な証言を引用する。

極度の用心をしながら可能なかぎり急ぎ足で前進し、ついに怖ろしい道を抜けた私は、サン・パウロ教会前の大きな広場で自己の保全と無事を確認しました。教会自体は数分前に倒壊し、参拝者の大半が下敷きとなりました。そこはリスボンでもっとも人口稠密な教区のひとつとされ、参拝者がいつもきわめて多いのです。しばらく立ち止って、どうすべきか思案しましたが、その状況では到底安心できず、教会西側の瓦礫を越えて、河岸へ辿り着こうと決意します。第二の震動を危惧して、揺れ動く建物からできるだけ速く遠ざかるうとしたのです。辛苦して決意を断行しましたが、ここで私はあらゆる地位や身分の男女から成る夥しい群衆に出会いました。そのなかに総大司教教会参事会員の幹部数名が認められ、イギリスの主教と同じくみな紫色の聖衣を着ています。幾人かの聖職者はミサの最中に式服のまま祭壇から逃げ出したのです。半裸の婦人も素足の女性もいました。彼らはみな同じ危険に曝されてここへ避難し、跪いて祈祷を続けますが、死の恐怖に憑かれた表情で胸を震わせ、「神よ、お慈悲を…」と絶え間なく叫ぶのです。

薔薇窓で名高いリスボン最古の名刹、サンタ・マリア大寺院が第三の版画の題

Edward Paice, *op.cit.*, pp. 68, 77.

Braddock, Letter to Reverend Dr. Sandby dated 13 November 1755, in Charles Davy, *Letters addressed chiefly to a young gentleman upon subjects of literature*, London, 1787. volume II. pp.21-23.

材である。ここでは大寺院正面の骨格が残骸として聳え、巨大な支柱の横転が地震の激烈な破壊力を感じさせる。絵図左端に配された建物は、隣接するサント・アントニオ教会の一部であろう。

リスボン攻囲によってイスラム勢力を敗走させたアフォンソー一世は、ときには回教寺院を改修しつつ、カトリック教会と教会教区を数々再興した。ポルトガルの歴史学者コウトは『リスボン市史』において大聖堂建立についてつぎのように語る。

リスボン陥落の一週間後、一一四七年十一月一日万聖節に四人の司教を伴ってアフォンソー・エンリケスは、回教寺院を浄化する儀式を行い、大聖堂を建立する決意を示した。実際に大聖堂が造られたのは、イスラム建築の廃墟ではなく、その近隣であることが、修道院の遺構発掘で判っている。キリスト教徒にとってイスラム教徒に対する四世紀ぶりの決定的勝利の記念として、大聖堂は十二世紀末に完成し、以後城砦と同じく王都に君臨するに至った。そこは世俗的権力の象徴でもあって、その広場には当初リスボン市会も造営されていた。

こうしてサンタ・マリア大寺院は十二世紀以来リスボン司教座を擁し、総大司教教会の創設まで大聖堂として最高の格付けがなされた。また、大聖堂には由緒あるサント・アントニオ教会が隣接し、その一帯はアルファマ麓の聖域として尊ばれていた。モレイラ・デ・メンドンサ著『世界地震通史―リスボン大地震』でも、これらふたつの教会については被災の有様が比較的詳しく述べられている。ここでは『地誌リスボンの古今』に誌された記録を参照したい。

もつとも古い名刹が怖るべき出来事、大地震から受けた被害も軽度ではない。強烈な衝撃によって穹窿と尖端が堂内中央の身廊へ倒壊し、強靱な円蓋も崩れてやはり身廊へ墜ちた。時計台を配した塔も同時に破壊され、いくつかの釣鐘も割れた。教会の内部では祭壇の高所に置かれた聖母像が首と胸に分断され、後日教会の近隣、ある婦人の敷地において発見された。聖歌隊席に飾られた十字架像、堂内の荘厳なオルガンも同じように打撃を蒙った。

Couto, *op.cit.*, pp.56-57.

Moreira de Mendonça, *op.cit.*, pp.127-128.

ついで発生した凄まじい火災も深刻な被害をもたらした。光輝ある殉教者、聖ヴィセントの遺体を納めた宝蔵が無惨に焼尽しただけでなく、それ自体が千切れ、焼かれた残骸となり、後日祭壇で発見された。聖母を祀るいわゆる大祭壇に飛火すると、炎はさらに勢いを増し、崇敬すべき聖像をはじめ、その衣装や壁龕へきがんのすべてを焼き尽した。教会の一部も火災によって甚大な被害を受け、地階の身廊の屋根が著しく破壊された。鐘楼内部の小礼拝堂でも同じ事態となり、すべて焼き尽されて、古来の文書保管室も灰燼に帰した。まもなく高名な建築技師、モノエル・マイヤが調査のため派遣される。聖器室までは破滅が及ばず、大寺院の装具や装飾も焼失を免れた。

サント・アントニオ教会北側のペドラス・ネグラス街には大聖堂に通じる参道と拱門が築かれ、道沿いの高層建築には在留外国人が数多く住んだ。教会など貿易商ブラドックの住居も、避難したが避難したサン・パウロ広場等も、この聖域からかなり遠いが、近くに住む在留民の証言が彼の書簡に挿入されている。

どれほど法外な破壊がなされたかを推察頂くために、ひとつの事例を申しましよう。イギリスの古い市門と同じように高樓の拱路が旧大聖堂の西門の正面にあり、その左側には高名なサント・アントニオ教会が、右側には高層の民家数棟が建っています。これらの建物で囲まれた空地は、ロンドンの小さな中庭よりも狭いのです。最初の震動のとき拱門の下を歩く人々は、この空地の真中へと避難しました。両側の教会のなかにおいて、脱出できた人々も、やはりそこへ駆け込みました。その瞬間教会の正面や隣接する建物とともに、拱門自体が地震の衝撃によって左右に傾き、空地に避難して立ち続ける全員を生き埋めにしつつ倒壊したのです。遺体を掘り出し、近くの野原へ運ぶため、この数日人夫も雇われましたが、その大半はなお瓦礫の下にあり、それらの移送が可能だとしても、悪臭を憂慮すれば、安全とは思われません。

歌劇場の被災を描いた第四の版画では、劇場内部の様相が壮大に表現される。左右の六階建客席がすべて粉碎され、巨大な障壁のみが屹立する。この歌劇場は

Bautista de Castro, *op.cit.*, pp.348-349.

Braddock, *op.cit.*, pp.57-58.

リスボン遷都五百年を記念して建設され、大地震のわずか半年前、王妃マイア・ナンア・ヴィクトリアの誕生日に開場した。その設計はイラリアの著名な建築家、ジョヴァンニ・カルロ・ビリエナに委嘱され、作曲家アントニオ・マゾーニやカストラート歌手カファレロなどが招聘された。

歌劇場の豪華な構造については、神父マノエル・ポルタルの記録が詳細である。歌劇場の北ほぼ三百メートル、ノヴァ・デ・アルメダ街のオラトリオ会修道院で被災した彼は、同志の聖職者に救出され、その後一年間の出来事を綿密に記録した。

王宮には歌劇場が隣接されていた。どれほど広い奥行か判らないが、横幅も同じく長大で、障壁もきわめて高く、大理石のバルコニーでは鉄製の欄干をつたって片側の空間から他方の空間まで移動できた。そこには水を満たした石造りの水槽が造られ、神からの劫罰に備えて消火栓も装置されていた。もっとも奥には半円形の平土間があり、貴族、聖職者、行政官などの位階別柵席が、舞台とほぼ同じ高さでに並んでいた。二階半円形の最前列には閣僚と国王ご一家の貴賓席が設けられ、三階の高みには各国大使の柵席も用意された。

この歌劇場がきわめて広壮であるため、軍人が乗馬で出仕した。遠近法を駆使して歌劇に相応しい特色ある背景が舞台に組まれる。ここに招かれたイタリアの音楽家は、多数に及ぶだけでなく、ヨーロッパにおいて最良の部類に属した。エゲシエリひとりを招請するだけに、衣食住の経費のほか年俸三万五千クルザードを支給し、付き人への手当としても一万クルザードを与えたのである。

三つの巨大なシャンデリア、優美で精巧な水晶のシャンデリアが天井から吊され、開演の前は平土間も特別席も照らされている。ここでは消火装置が絨毯で隠され、燦然たる照明を楽屋裏に放ち、舞台が進行する。

歌劇場の公演、地上の桃源郷を楽しむ観客について言えば、彼らに付きそつ従者が多すぎる。ともあれこれこそヨーロッパにおける最高の歌劇場、ないし最高の歌劇場のひとつである。

開演を待つ広間には到る所に水晶の鏡と美事な木彫りが配され、四隅には大理石の大きな胸像が置かれている。開幕まで国王陛下をお待たせするため

か、広間がかくも豪奢であるため、舞台の建造に劣らぬ出費と評される。

かつまた、容姿や衣服を整える化粧室では、出演者の衣装を実際には高価でなくても、贅沢なものに装う必要があった。

ヨーロッパにおいてとくに著名な歌劇場、数百万クルザードの費用と言われる歌劇場が、儚くも一気に壊滅したことを伝えるため、以上私は予備的な事実について書いた。まさしく火焰によってすべてが燃焼し、灰塵に帰したのである。これについてとくに信頼できる人物の証言を誌したい。歌劇場が燃え始めたとき、彼女は王宮に留っていた。激烈な火勢はあらゆる装置や油性の物体を焼き尽した、と。また、こうした異変のまさしく前触れであろうが、すでに王宮では大砲の発射に似た轟音が聞えたと言う。地震では倒壊に到らなかつたが、火災によって歌劇場は黒焦げの石材の山、崩れ落ちた障壁の谷となった。

サン・パウロ広場の凄惨な光景を避け、河岸近くへ避難した貿易商ブラドックは、まもなく津波の襲来に曝され、角材を握って九死に一生を得る。しかし、中心部に住む親友の安否を気遣って、ブラドックはふたたび王宮広場へ向かい、歌劇場の壊滅を目撃する。

そこから先に進んでアイルランド・コルポ・サントス修道院前の大きな広場へ偶々出ました。この修道院も崩れ墜ち、ミサに参じた沢山の人々が修道士数人とともに下敷きになっています。ほかの会衆は放心の面持でそこに立たまま、瓦礫を見詰めています。その広場から造船所に沿って私は王宮への裏道を辿り、さらにひとつの小路から主要道路へ抜けました。そこで歩を止めたのは、莫大な経費をかけて完成したばかりの歌劇場、ヨーロッパでもっとも堅固で壮麗な歌劇場のひとつが倒壊しているからです。その向側にあるプリストウ氏の邸宅を、巨大な石材の山塊、各々数トンもの巨岩が封殺しています。同輩であるワード氏が翌日私に語ったところでは、彼が邸宅の玄関を出る瞬間、一步敷居から踏み出した瞬間に、歌劇場の西端が墜落しました。瞬時に後戻りしなければ、微塵に打ち砕かれたと言つのです。

Manoel Portal, *Historia da ruina da cidade de Lisboa*, in Pereira de Sousa, *op.cit.*, pp. 602-603.

Braddock, *op.cit.*, pp.37-39.

第五の版面に表現されたサン・ニコラス教会はリベイラ王宮とロシオ広場のほぼ中程に位置し、その起源はサン・パウロ教会よりもさらに古い。宗教史によれば、一二八〇年に司教マテウスが新たな寺院の建造を指示し、一四三〇年ジョアン一世はこの教会の収益をリスボン大学に分与するよう命じた。また、この教会は一六五〇年に再建されたと、外壁の石碑に誌されている。パウテスタ・デ・カストロは『地誌ポルトガルの古今』でこの教会の被災をつぎのように誌す。

大地震に襲われた不幸な日、サン・ニコラス教会は無惨にも完全に破壊され、直後の火災にとって貴重な品々もすべて焼失した。また、痛恨の極みであるが、教区に住むおほぼ四千人がこうした災厄によって死亡した。教区が壊滅し、荒墟に化し、居住不能となったのである。主任司祭はグロリア坂のプレザ礼拝堂に居を移し、ロシオ広場の仮設小屋を拠点とするサンタ・ジュスタ教区と被災直後の二カ月間連携を密にした。

サン・ニコラス教区は王都のもっとも繁華な地域であって、平行するふたつの大道、プラータ街（銀座通り）ウウ口街（金座通り）を基軸に多くの細道が複雑に交叉していた。そこには金銀細工師や宝石商が住み、織物業者、皮革商人、呉服屋、小間物屋が軒を連ねたと言われる。サント・アントニオ教会の北側と同じく、この一帯にもいわば外国人居住地があった。イギリス人貿易商ローレンス・フォークスも、この教区のムダス小路に商舗を持ち、万聖節の朝ふたりのポルトガル人に応対していた。そのとき轟音とともに大地が激しく揺れ、みな近くの拱門のもとへ避難した。以下は貿易商フォークスが後日実弟に宛てた書簡である。

怖るべき第二の震動は来しました。暴風に翻弄される船の帆柱のように自宅が前後に揺れるのを見て、頭上に倒壊するのではないかとそのとき震えましました。神へ慈悲を願い、その甲斐がありました。震動が止むや、ルイスさんが瓦礫を踏み分けてサン・ニコラス教会への道を探しました。やや遠いが、通れる道はある、と彼が報告します。自分のあとに続くよう、ただちに私は

Bautista de Castro, *op.cit.*, pp.375-387.

França, *op.cit.*, pp.21-22.

家族全員に命じました。こうして全員がサン・ニコラウス教会へ避難しました。しかし、ここでは恐怖に困苦が加わり、さらに遠くへ一緒に逃れようと決意したのです。一方では多数の人々が死に瀕し、他方では聖職者に付き添われた人々が瓦礫の間を駆け回って、みずから懺悔を行い、息絶えだえな者に救いを勧めるのです。(まさに衝撃的な光景でした!) 神よ、お慈悲を、とだれもが大声で叫びます。私はサン・ニコラウス教会を迂回し、アルコス街を経て、ロシオ広場へ辿り着きました。途上では悲惨な人たちを幾度か救いましたが、怖ろしい場面にますます出会うばかりです。これを喩えるならば、若き頃脳裡に教え込まれた絵図、哀れな罪人が最後の日に「神の慈悲を」と叫ぶ絵図にほかなりません。

第六の版画に描かれた総大司教の塔と広場は、カトリック教国ポルトガルの重要な表徴と考えられる。王権神授説を支えとする専制君主ジョアン五世は、ローマ教会からの加護を堅固にするため、一七一七年リスボンの総大司教座昇格を達成した。これを裁可するにあたってローマ教皇は、壮麗な総大司教教会の造営を求めたとされる。しかし、過大な歳出を憂慮した側近の諫言によって、国王は王宮内の王室礼拝堂を拡張し、内部を豪華にするに止めた。そこにはイタリアの著名な銀細工業アントニオ・アリージに委嘱された銀の十字架、さらにはヨーロッパ全土から集められた遺物の莫大な蒐集が飾られる。『地誌ポルトガルの古今』第五部では王都リスボンの史実と史蹟が網羅的に収録され、総大司教座の成立についてつぎのように誌される。

豊潤な恩顧と榮譽をもって寛仁なるジョアン五世は、王室礼拝堂を広壮のものに改造し、王者としての敬虔な信仰心を示されただけでなく、一七一六年十一月七日に発せられた黄金勅書によってローマ教皇クレメンス十世から布教活動の最高の位階に聖化され、大司教座聖堂の名高い神殿が聖母被昇天に祈願する総大司教座に昇格された。この結果王都の司教区はふたつの地域に分割され、西側では総大司教座が確立された。こうして王室礼拝堂の

Lawrence Fowke, *A Genuine Letter to Joseph Fowke, his brother dated November 1755*, pp.4-5.

Edward Paice, *Wrath of God, the great Earthquake of 1755*, London, 2008.

p. 19.

威厳と総大司教座の確乎たる権威が融合し、総大司教がブラガを含む王国のあらゆる大司教と司教の上位を占めることとなった。

また、一七三〇年パリで刊行された著者不詳『都市リスボン細叙』は、ジョアン五世治下の王都と世情について豊富な情報を記載しているが、総大司教教会の造形的な豪華さとともに、新たな大聖堂としての権威が以下のように語られる。

総大司教座は王宮の礼拝堂にある。月並みな建築で壁画も平凡であるが、堂内はきわめて広壮である。内陣の祭壇のほか十二の祭壇があつて、いずれも壮麗に飾られている。寶石を鏤めた二段の特別席が設けられ、普通国王と王妃がその席でミサに臨む。日曜と祭日には通常総大司教が主宰にあたる。祭壇では十八人の聖堂参事会員がみな僧帽を被つて大司教を補佐し、三十名ないし四十名の聖歌隊がこれに加わる。器樂を伴わぬローマ式音楽であるが、聖歌隊のなかには優れた歌い手が多い。

総大司教はドン・トマス・デ・アルメイダというお方で、以前はポルトの司教であられ、宰相の弟君にあたる。国王は彼を相応の邸宅と設備で遇しておられる。儀式の次第を述べよう。まず総大司教座の十字架が騎馬によって運ばれる。すぐに続いて徒歩の従僕二十人に護られ、総大司教を乗せた豪華な駕籠が現れる。そのあと豪勢で巨大な有蓋馬車四台が各々六頭の驟馬に牽かれて来るが、その先頭は無人の裝飾馬車であり、他の三台には総大司教に次ぐお歴々が分乗する。

これら僧帽の聖堂参事会員は第一級の貴族より選抜される。司教の地位を授かり、国王から各自五千クロワサード、フランス貨幣にして実質約八万リブルの年金を受けとる。聖務を彼らはきわめて厳密に遂行し、自己の威厳を完全に發揮するため、通常駕籠に乗り、徒歩の従者六名を従える。

総大司教広場は王宮の北側に築かれ、繁華なサン・ニコラス教区、商易の拠点である河岸地区、さらには高台のシアード地区と王宮をを結ぶ枢要な地点にあつた。王宮広場に比して面積は小さいが、総大司教教会とこれに隣接する歌劇場等の建造物が、壮大な景観を呈したと言われる。『地誌ポルトガルの古今』では

Bautista de Castro, *op.cit.*, pp. 183-184.

Anonyme, *Descriptions de la ville de Lisbonne*, Paris, 1730. pp.16-19.

この教会の成立について述べたあと、被災の状況がつぎのように記録される。

王室礼拝堂と総大司教教会において国王は荘厳な儀式として行事を遂行させ、そこでは神を祀るすべての宗教的典礼が類稀な華麗さと驚異的な厳密さで営まれた。告解のためこの教会へ入るのを許された外国人の讃辞によれば、荘厳さ、輝しさ、豪華さにおいてローマの教皇教会にさえ比肩するのである。

したがって、十一月一日悲劇的な地震に突然襲われたとき、ミサの祈祷を始めた聖職者たちは、異常なまでに狼狽し、動揺し、錯乱した。

教会中央の聖歌隊が急に中断したかと思うと、強烈な震動が続いて、建物全体が凄まじく揺れた。これに慄然として大混乱となり、不意の破局からみな逃れようとした。だれもが被害を怖れて突然の争乱となり、死を免れようと、人々は混み合う通路に殺到する。助けてくれと我先に叫んで、礼拝堂の窓から無謀にも中庭へ跳び降りる者もあった。

袖廊の上級聖職者も愕然とした。この方々は柙席から中央の祭壇へ登るところであったが、非常口が閉鎖され、回路を通れないのである。多くは自己一身よりも衆生を案じ、キリスト教の堅い志操で神の慈悲を祈念された。ついにひとつの出口が開くや、だれも自分だけは危険から逃れようとも揉み合う。このときアンジェラ侯爵のご子息、上級聖職者フランシスコ・デ・ノノン様はチュートン広間への回廊で率先して会衆を誘導され、男盛りで早過ぎる死をそこで遂げられた。警備班の頭上に聳える露台が一挙に破壊され、墜落したからである。聖堂参事会員の尊厳な位階制によって聖なる上級聖職者団に最近昇格されて、二度目の盛儀に尽力されたばかりであった。

地震に続いて火災が発生し、当代の豪華のすべてを完全に焼き尽くした。こうした混乱と孤立に加えて、礼拝堂などの石材が崩れ落ち、礼拝を行うのに適した場所を決めることが、幾日も司祭たちにはできなかった。

歌劇場の倒壊を目撃した貿易商ブラドックは、国王一家の運命をも案じながら王宮広場へ向かったが、瓦礫に遮られて進めない。迂回して再度総大司教広場に近づくと、世にも凄惨な光景が待ち構えていた。外国人在留者の記録には建造物内部の状況を伝える叙述はすくないが、街々の惨状と民衆の艱苦については委細

を仄している。

そこから引き返して私は、リンカン・イン・フィールドの二倍もある壮大な王宮広場を目指しました。さきに述べた埠頭が広場の向側に築かれていましたが、もはやありません。しかし、こちらの通路も巨大な拱門から落下した石材で塞がれました。とくに私が憂慮したのは、国王ご一家が平素暮らされる住居が倒壊し、地震のときそこに居られたら、稀有な奇蹟のないかぎり、かならず逝去されたでしょう。通路を通れないと悟って、新王宮広場へ導く他の拱路へ転じました。そこは王宮広場の八分の一の広さしかありませんが、王室礼拝堂を兼ねた総大司教教会が一方の側に造営され、他方の側にもつとも壮麗な近代建築、おそらくそのためになお完成しない建造物が聳えています。前者については屋根と正面の障壁は倒壊し、堅固と思われる後者での震動によって数個の巨石が頂上から墜落し、到る所が破損したように見えます。その広場には御者や従僕や持主を失った四輪馬車、戦車、幌馬車、牽き馬、驟馬が溢れていました。

地震が発生したとき、神聖な儀式に参列していた貴族、貴紳、聖職者は、周章狼狽して逃げ出し、戦慄のあまり多くの祭壇の燦然たる聖器を放棄し、侵入者の意のままにしました。しかし、さしてこれを私が気に留めなかつたのは、不幸な動物たちが苛酷な運命に翻弄され、極度に苦しんでいたからです。死ぬものも、傷ついたものも多少いましたが、大半は怪我もないのに、置き去りにされて、餓死を待つのみです。

この広場から友人の住居へ険しく長い道が通じています。そこで目撃した新たな光景はまさに言語を絶するものでした。ため息と呻き声しか聞えず、道で出会う人はみな、親友や近親の死を、すべての資産の喪失を嘆くのです。一歩進む毎に、死せる者か、死につつある者に踏み当りました。数カ所で四輪馬車が粉碎され、持主や牽き馬や御者とともに横転しています。こなたでは幼な子を抱き締めた母親が、かしこでは着飾った婦人、聖職者、修道士、貴紳、職人が息絶えたか、息絶えつつあるのです。背中を打ち砕かれた者もあり、胸に巨石を受けた者もいます。瓦礫の下に生き埋めにされた数名も、道行く人に空しく救いを求めるのですが、やはり絶命するよう放置されました。

総大司教会一帯に無数の遺体や負傷者が連なり、総大司教ドン・ジヨゼフ・エマヌエルそのひとも危険に曝され、避難先へ担架で運ばれた。ポルタル神父と同じくオラトリオ会修道院に属するペレイラ・デ・フィゲイレド神父もリスボン大地震を記録した冊子を上梓し、モレイラ・デ・メンドンサ著『世界地震通史』でも高く評価されている。つぎに引用するのはこの冊子に誌された総大司教の被災状況である。

倒壊の危険が迫ると、リスボン総大司教枢機卿ドン・ジヨゼフ・エマヌエルは柵席から従者に背負われて脱出された。さらに担架で近郊のオラトリオ会修道院に避難されたが、従者のうち六名は死亡した。

しかし、まもなく総大司教はポルトガル王権の懇請に応じて震災への緊急措置に協力し、聖職者団体に遺体処理などの作業を支持する。また、神の怒りを鎮撫すべく祈祷行事等を主宰した。こうした国家的な宗教行事における総大司教の役割をペレイラ・デ・フィゲイレドは以下のように伝える。

この間良き牧者の責務を総大司教座枢機卿は担われた。すなわち、宗教的な儀式を行うべく様々な場所に小屋を建てるよう指図され、いかなる告白をも聴聞する権限をすべての聖職者に与え、聖母マリアを讃える国家的な断食を数日間命じ、神の怒りを鎮めるため公的にも私的にも祈祷を捧げるべく配慮したのである。こうした目的のため十一月十六日日曜日に悩める聖女教会へ全市を挙げて祈祷行列が営まれ、生き残った者の生存を神に感謝した。この儀式には国王陛下もご一家全員とともに臨席される。また、毎年聖母マリアの加護祭において歳々の国家的な断食とともに毎年同じ行事を継続することが、公の誓いとして定められた。

三 画集『リスボン荒墟の偉観』の意義および特色

Antonio Pereira de Figueiredo, *A narrative of the earthquake and fire of Lisbon*, London, 1756. pp.14-15.

Pereira de Figueiredo, *op.cit.*, p.19.

画集『リスボン荒墟の偉観』で描写された地点と建物について、それらの由来や役割を把握した私たちは、博識多才なペデガシユが豊かな学殖をこの画業に遺憾なく組み入れたと感じざるをえない。

王都の破滅を表現する素描の第一は、リスボンの創建と防衛を伝える古蹟、サン・ロケの塔であった。画集の最後を締め括るのは、当代の権勢と栄華を集結させた総大司教広場である。被害の甚大な低地帯については、人口稠密なサン・パウロ教会とサン・ニコラウ教会の一角が一方で選ばれ、華美な貴顕が集う歌劇場が他方で選ばれた。高地帯では西側バイロ・アルトに建つサン・ロケの塔に、東側アルファマに聳えるサンタ・マリア大寺院を対比させたとも考えられる。

古今の地震を描いた膨大な図像が、チエコ科学アカデミーの地球科学者ヤン・コザックによって集積され、リスボン大地震についてもカリフォルニア大学バークレー校の工学者チャールズ・ジェイムズの協力のもとに、九八の作品がオンラインで公開されている。これらの史料は逐一綿密な検討と系統的な評価を必要とするが、ここでは画集『リスボン荒墟の偉観』の意義と特色を明確にするため、数点の絵図に限り考察したい。

ジェイムズとの共同執筆による論文「リスボン大地震の絵図」において、コザックは震災を表現した代表的な図録としてルバによる版画「総大司教広場」と一八世紀末の版画「リスボン大地震の劇的光景」(別掲「リスボン大地震の絵図」)を提示した。これらふたつに共通して描かれたのは、地盤を陥没させ、建造物を倒壊させる凄まじい地震の破壊力である。地震工学における課題のひとつは、施設や建物に対する衝撃を数量的に計測することであり、これらの作品は震動の規模を検討するのにも役立つと言う。現代の自然科学者コザックとジェイムズによる十八世紀絵図の分析をつぎに開陳する。

これらふたつの版画は異なる地域における相異なつた現実を表現する。ルバの版画に描かれたのは、地震で破壊され、おそらく火災の被害も受けた建物である。大部分硬い岩石と思われる丘は、ところにより僅かに地割れしているが、大量の土砂崩れは見当たらず、断層や地滑りもない。広場では丘の麓を歩く人もあり、破壊された前景の障壁や建物も地中に埋もれた様子はない。この絵画と版画の目的は現実的・経験的手法によって、一七五五年万聖節の出来事による建物の被害状況をできるだけ正確に明示し、地震のより深

い意味は付加しないところにある。対照的に第二の版画に描かれるのは、強い震によってもほとんど無傷であった人たちと石造りの建物が、地中に沈んでいく様相である。このとき地盤がなば液化しているように見える。ここでは港湾近くの軟弱な土壌が溶解するのを、大胆に描くこともできたであろう。また、付近の断層作用によって惹き起され、住民を呑み込んだ地割れをも表わせたかもしれない。さらには港湾に接する土壌が内陸へ拡がったり、丘陵から下降する土壌が、不幸な人々を押し流す様子をも描写できたであろう。しかし、被災者を中央に描く手法からも察せられるとおり、第二の版画の目的は人間の災厄を表現することであった。自然現象を正確に描出するよりも、むしろ庶民の艱苦に焦点が置かれたのである。彼らを描いた画像によって、被災地から遠く離れた人々にも、地震の犠牲者への関心と同情を喚起できたと思われる。

これらふたつの図録は地震についての相異なる見方を示すとともに、イギリスとフランスの啓蒙思想に掲げられる普遍的な課題を表わすように思われる。すなわち、ひとつは自然災害への迷信的・教理的解釈への理性的・科学的・経験的推論の勝利であり、他は万人の福祉を願う心豊かな希求である。

啓蒙思想の影響と思われる第一の要素、自然災害の経験的・科学的表現として、さまざまな絵図のなかで画集『リスボン荒墟の偉観』が第一である、とコザックは称讃する。啓蒙の政治家ポンバルと同世代のペデガシエは、日蝕の観測も行ったと伝えられ、自然科学の素養、力学や工学の知識さえも備えたと思われる。とくにこの画集では六つの連作によって、建造物に及ぼす地震の物理的作用が様々な描写された。こうした作品の特色を一層明確にするため、コザック「ジエイムズの論文ではさらにひとつ代表的な絵画「リスボン、サンタ・カテリーナ広場」(別掲 リスボン大地震の絵図)が分析される。この油絵は一七六〇年ジョアン・クラマによって制作され、高台へ避難した群衆が陸離たる彩色で描かれている。サンタ・カテリーナはリスボンを形成する七つの丘のひとつに数えられ、その高台に由緒ある教会と広場が位置した。サンタ・カテリーナの教会教区は広く、低地帯の河岸地区も一部含まれる。貿易商ブラドックの住居もこの教区に属

し、岸边で第二の震動に襲われた彼は、遠くのサンタ・カテリーナから建物の倒壊と民衆の悲鳴を耳にした。

クラマの油絵には避難する多くの被災者が前景に描かれ、彼らの半数は横臥している。遠景には破壊された教会が、なお炎と煙に覆われている。しかし、この絵図には宗教的な要素も濃厚であって、

屹立する十字架、教諭す聖職者、跪拝する信者の画像によって、神の怒りによる劫罰であったこと、必死の祈祷によって神の慈悲を求めたことが示される。空中を飛ぶ天使の姿は、寛恕を得た未来の幸福を暗示するものである。当時の一般的な心性や想念に合致するのは、このような描出と考えられる。これとは対照的に『リスボン荒墟の偉観』では教理や信仰に基づく表象が完全に排除される。この画集を構成する版画六点のうち、五つまでがカトリックの建造物を対象とするにもかかわらず、明らかに十字架や聖職者と確認できる図像はひとつもないのである。

啓蒙思想のいまひとつの理念、万人の福祉との係わりを考えてみよう。避難する人々の艱苦はクラマの油絵からも読み取れるが、

被災者の悲惨や救助を主題とする作品はかなり見出される。コザックに提示された「リスボン大地震の劇的光景」に加えて、筆者は震災後の奉納画「子どもの救出」(別掲 リスボン大地震の絵図)とチェコで制作された銅版画「四万人の生き埋め」(別掲 リスボン大地震の絵図)とをここで挙げたい。聖母マリアに捧げられた奉納画では生き埋めになったひとりの子どもが数人の男に救出され、なおも作業が続いている。この絵図がごどもの生存と幸福を願う心情から生まれ、万人の福祉への希求に根ざすことは言うまでもない。幼な子を抱くマリアの図像によって、救出できた感謝の気持を表すとともに、来世における犠牲者の至福を祈ったのである。 他方銅版画「四万人の生き埋め」では、大地震の激震の襲われた住民の一群、その大半である女性が前面に大写しされ、被災者の動顛し、痛嘆する表情も克明に描かれた。見出しのチェコ語は、「十分間に四万人が生き埋めとなり、死亡した」と読み取れる。頭上で建物が崩れ、遠景に火災も見られるが、ここでも宗教的要素は払拭され、彼らの惨状が一層絶望的に感じられる。これらの絵図の主題である被災者の惨状が、『リスボン荒墟の偉観』では皆無に近いことは否定できない。しかし、その事由はペデガシエらが民衆の幸不幸に冷淡なためではなく、さきにコザックも指摘したとおり、作品の目的と主題が異なるためである。

しかし、さらに別の視点からペデガシエらの素描、ルバの版画をを考察してみよう。彼らの絵図では被災者の艱苦が表現されぬだけでなく、地を覆う瓦礫も累

々たる遺体も多くは撤去されている。こうした画像は『リスボン荒墟の偉観』の制作が、地震発生から相当の日数を経たのち、行われたことを立証する。また、六つの画面すべてに添えられた人物像を仔細に眺めると、呻吟や悲嘆の様子はなく、物腰や衣服も乱れてはいない。数人ずつ荒墟に立ち止まる人影は、むしと破壊の状況を確認したり、復興への対策を指示しているとも映ずる。『地誌リスボンの古今』によれば、サンタ・マリア大聖堂では被災後まもなく高名な建築技師マイヤが王権によって現地に派遣された。版画「サン・ニコラウ教会」や「大聖堂」にそのような人たちの絵姿を読み取ることも、あながち不条理ではないであろう。『リスボン荒墟の偉観』の要素として災害の収拾や復興への始動が含まれるとすれば、そこには啓蒙思想に通じる別の特徴が感じられる。なぜなら、自然に対する科学的認識や万人の幸福を願う希求とともに、啓蒙思想には理性に基づく未来の建設という理念が含まれるからである。

多岐にわたるペデガシエの業績を詳しく紹介した研究者ジョン・ポール・ポワリエは、『リスボン荒墟の偉観』が壮大な構図によって十八世紀後半のロマン主義美術に影響を与えたと評価している。ただし、版画第一において遠景に描かれた宮殿が無傷であるのは、奇妙に感じるとポワリエは註記する。おそらくこの絵図は「リスボン、サンタ・カテリーナ広場」と同じく震災の純然たる写真ではないであろう。総大司教教会の遠景として描かれた建造物は、先頃まで聳えていた宮殿、あるいは早晚再建すべき宮殿かもしれない。クラマの油絵に描かれた天使が被災者の救済と今後の幸福を象徴するように、こうした添景にペデガシエらは幸ある未来への希望を託したとも思われる。『文芸通信』に掲載された推薦文には、この版画集が図書館だけでなく、愛好家の折靴や書齋にも蔵されるように、と書かれていた。『リスボン荒墟の偉観』に復興への始動という一抹の明るさがなければ、そのような勧めはされなかったであろう。